

(鹿児島市上福元町笹貫湯貫迫)

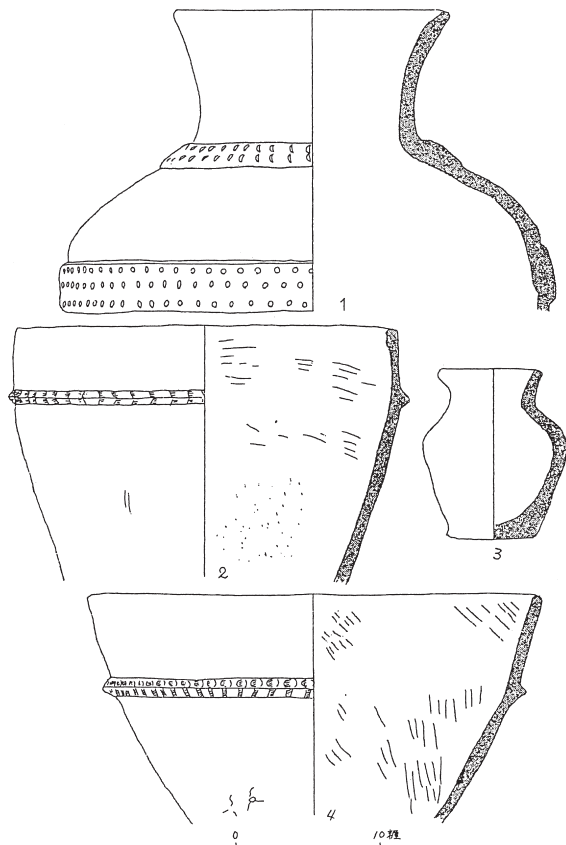
位置と環境

当時、笹貫遺跡は谷山町に属していた。谷山町は鹿児島市の南に接しており、鹿児島市南端の紫原シラス台地は、海に迫って絶壁をとなり、この台地は南へ延びて谷山の市街地に至って尽きる。

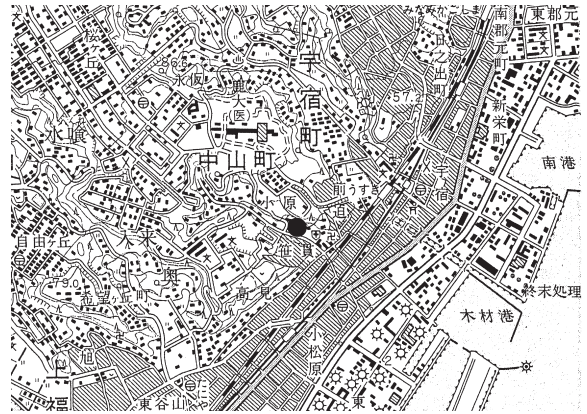
台地の北東部は脇田川の谷、南西部は桜川の谷、中央部は笹貫に開く谷に三分され、遺跡は笹貫の谷の北麓にある田原万伍所有畑地である。昭和20年3月（太平洋戦争末期）この地域に海軍燃料貯蔵所が建設され、前記畑地を燃料運搬通路として、北側に隣接する畑地との境界に沿って、地下げが行われた。この工事によって、大量の遺物が発見された。

調査の経緯

遺跡より発見された遺物は谷山中学校に保管された。報を得た筆者は、寺師見國・三友国五郎の両先生に来ていただき、昭和24年9月23・24日、同年11月8・9日の4日間調査した。



第2図 笹貫遺跡出土の土器



第1図 笹貫遺跡の位置

遺跡は田原万伍所有の畑地に主体があったが、工事によって既に消失していた。しかし隣接畑地の断面に遺跡の末端が残存していた。

層序は、第1層、地表下2m・黒褐色土（開墾された段々畑で、表層は人為的に厚くなっている）。

第2層、黒色粘質層、50cm、遺物包含層である。出土遺物は土器・127片中、薩摩式土器（樋口清之の命名による）121片、須恵器6片で、石器では石錘、叩石が出土した。

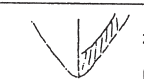

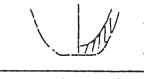

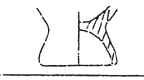
遺構と遺物

遺跡の中心部は、燃料輸送道路の工事によって、既に失われており、推定することもできないが、残された部分の調査によると、遺跡周辺の土器溜と見られる。この時期になると、土器を集めて一か所に埋めた遺跡が屢々発見されている。その一例と考えられよう。

土器には、壺形・甕形・鉢形・高杯形などの土器がある。胎土には砂粒を多く含み、粗製であるが、高杯形土器は、精選した土を使用している。

壺形土器、口縁部は直口に近く、端部で僅かに外反し、胴部は倒卵形で、肩部が張り、頸部と腹部に幅の広い凸体を巡らし、竹管文・S字文・格子状文など目立つ文様を付し、刻み目の中に布目圧痕を施したのも見られる。胴部以下は締まり、尖底または小さな平底に終わる。小型壺形土器では凸帯のないものが多い。

甕形土器、甕形土器は頸部が最大径を有し、刻目凸帯を巡らす。口縁部はわずかに締まり、胴部以下は直線的に細まり、底部は中空の上げ底である。底

形 式	数量	%
	4	28.5
	4	28.5
	6	43.0
小 計	14	100
	18	69.3
	8	30.7
小 計	26	100
総 計	40	

第3図 土器底部の変化

言えるもので、一般化されないもので、用途に応じて製作されたものであろう。

高杯形土器、杯部は、縁は屈折して立ち上がり、柱状脚部は下半え開くもので、胎土は精選されたものを用い、外面は丹塗されている。

壺形土器・甕形・鉢形土器の底部に見られる変化

壺形土器の場合は、小さな平底と、丸底・とがり底の三つのタイプがあり、第3図に見られるように、平底が43%に対して、丸底・とがり底は共に28.5%である。丸底・とがり底を同類と見れば、丸底・とがり底が優勢である。この時期は平底から丸底・とがり底への移行が行われた器形変容時期と見られる。甕形・鉢形の場合は、底部の底面に突起があるものと、突起がなく平坦なものがみられ、突起があるものが、69.3%で、底面が平坦なものは30.7%で、突起のあるものが優勢である。これも一つの器形変容の現象と見られる。この場合丸底の土器に環状の器台を接着した土器の事例があり、両者の間には同じ変化の流れの中でおこった現象と見ることができる。壺形土器では平底から丸底・とがり底へ移行する過

程の中で、甕形土器・鉢形土器の場合は、平底の底部が肥厚して、充実した脚台となり、さらに中空の上底となる過程の中で起こる現象で、土器のタイプが変化して、次なるタイプへ移行し、社会的慣習として定着する現象を、我々が最も理解しやすい形で示してくれる重要な資料となっている。

程の中で、甕形土器・鉢形土器の場合は、平底の底部が肥厚して、充実した脚台となり、さらに中空の上底となる過程の中で起こる現象で、土器のタイプが変化して、次なるタイプへ移行し、社会的慣習として定着する現象を、我々が最も理解しやすい形で示してくれる重要な資料となっている。

土器型式の所属

篋貫タイプの土器は須恵器と共伴しているにも拘らず、久しく弥生式土器として認識されてきた。まず最初は、マンローの大正4年の調査である。マンローは垂水のクノギハラで中間土器（弥生）と齋瓶（須恵）との共伴を知ったが、層位的な解釈を加えてこれを認めず、中間土器としての認識は改めなかった。

次は、大正8年の浜田耕作による指宿市橋牟礼川遺跡の調査である。上層出土の土器は、同じ層から須恵器も共伴出土していたが、弥生式土器とされた。以来いわゆる薩摩式土器は、弥生式土器とされており、篋貫遺跡調査の時点でも同様な認識であり、以後も同様で、昭和30年の成川遺跡の発掘までは弥生式とする考えに変わりはなかった。

資料の所在

出土遺物は、河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

- 河口貞徳1949「鹿児島県篋貫遺跡」『日本考古学年報』2 日本考古学協会
- 河口貞徳1952「篋貫遺跡」『鹿児島県考古学会紀要』第2号 鹿児島県考古学会
- ドクトル・エヌジー・マンロー1915「太古の大和民族と土蜘蛛」『考古学雑誌』第六巻第四号
- 京都帝国大学文学部考古学研究室0000「薩摩国揖宿群指宿村土器包含層調査報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第六冊

(河口貞徳)